

## 「日本の枕」～外国人研究員支援の日常～

ATRには海外から来た大勢の研究員がいます。彼らが安心して暮らし、研究ができるよう、ビザ手続き、生活相談といったサポートを行っています。ではその日常を……

「日本の枕ってどんなのか知ってる？」社宅に向かうバスの中、入国して数時間しか経たない外国人研究員に聞いてみる。「えーと……」たいがいの人は即答できない。「社宅に着けばわかるけど、石みたいに硬いのよね。でもね、頭のツボを押さえるから、きつと血行がよくなって、いい研究ができるよ。」と用意した枕を、さも特別なもののように説明する。すると、自然に研究員もそれで二、三日試しに寝てみようという気になってくる。

実はどこにでもある日本式の小さな硬い枕で、しかもレンタルしたもの。社宅には即日生活ができるようにと、電化製品やテーブル、椅子などの備品が用意されている。今まで、世界各国から来た研究員に、たいがいのものは受け入れられてきたが、寝具だけはべつ。通常ATRでは布団を用意するが、ベッドに慣れている人たちの多くは枕が硬いことを始めとして、敷き布団が薄いこと、さらに床（畳の間なのだが、本人にしてみればただのfloorになる）に寝ることに抵抗を感じる。確かに一日の大きな割合を布団の中で過ごさなければならない訳だから、じっくりこないと快適な生活環境とは言えない。

そこで、海外からの研究員をサポートしている我々スタッフは、日本の生活が研究員の母国とどう異なっているかを把握し、本人にとって受け入れにくいものを如何にして受け入れやすくするか、また、どうしたらそういった新しい経験を『楽しく』感じてもらえるか思索する。枕に関する会話もその一つの例で、なるべくプラス思考へとリードする。できるだけ、ありのままの日本を知り、慣れ親しんでもらいたいがらだ。

海外からATRに来た研究員は、日本や日本語に興味があってというより、真によい研究をすることを目的としている。ATRでは働いてみたいが、異国での生活には不安で、二の足を踏んでいる研究員に、安心して来日してもらうことができれば、という願いで始まったのがこの外国人研究員支援業務である。最初は生活相談の受付窓口として始まり、その後各研究所が担当していたビザ手続きも一手に引き受けることになった。支援内容は年々幅広いものとなって現在に至っている。

殆どの人が最初の数日でいろいろな相談にやってくる。来日してから一週間のうちに一度も相談に来ないと、こちらが心配になるくらいだ。中古の自転車を購入したい、尺八を習いたい、冬休みに母国に残した子供を呼び寄せて日本の小学校に体験入学させたい等々、同じ相談を受けることが稀なほど多様な内容だ。深刻なものになると「今、骨を折って病院にいるんだけど、なかなか診療してくれない。」と、突然電話が入ったりする。その度に右往左往するが、あえて、それも本人に見てもらおう。また、代理となって話をする必要があるときは、隣にいて聞いてもらう。なぜなら相手のいる場合、本人の意向に沿わない結果に終わることが少なくないからだ。そういう時でも、どれだけこちらが本人のために努力をしたのか、日本語が分からなくても肌で感じてもらうことで、信頼が得られる。それでまた相談がくる。こちらが信頼してもらうためにはアピールが必要と工夫をこらす。この連鎖があって初めてこの業務が成り立っている。

このようにして、業務を通じ多くの人々に接する。研究員の滞在期間はさまざまで、10年以上の人から1カ月程度の人までいる。毎月入国する人がいて、帰国する人がいる。そういった人の流れを大切にして、いずれ帰国するであろう研究員を通じて、より多くの人にATRを知ってもらおう機会をつくり、また優秀な人材の来日につながる手助けになることを励みとしている。



社宅設備を説明中の外国人研究員支援スタッフ（写真左から三神、辰巳）

